

出生81万人 少子化加速

国推計より6年早く到達

昨年 出生率1.30

2021年に生まれた日本人の子ども（出生数）は81万1604人で、データがある1899年以降で最少となった。前年より2万9231人（3・5%）少なく、減少は6年連続。国の推計より6年早く81万人台前半に突入り、少子化の加速が鮮明になった。

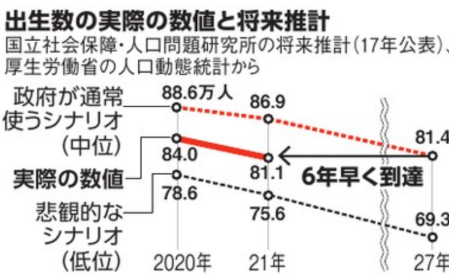
厚生労働省が3日、人口動態統計を発表した。国立社会保障・人口問題研究所が2017年に公表した将来推計では出生数を3種類で想定。政府が通常使うシナリオ（中位）では21年に86・9万人、悲観的なシナリオ（低位）は75・6万人と算出していた。

▼3面|| 保育現場に危機

21年の実際の出生数は81・1万人で、政府のシナリオと悲観的なシナリオの間付近の数字になった。政府のシナリオは81万人台の前半になるのは27年と見込んでいたが、想定より早く少子化が進行している。日本人の人口が1億人を切るのは49年と想定していた



が、それも早まりそうだ。1人の女性が生涯に産む見込みの子どもの数を示す「合計特殊出生率」は1・30で、前年より0・03ポイント下がった。6年連続で低下し、過去4番目の低水準となった。人口を維持するの



30で、前年より0・03ポイント下がった。6年連続で低下し、過去4番目の低水準となった。人口を維持するの

に必要な出生率(2・06)だけでなく、政府が目標とする「希望出生率1・8」とも大きく乖離している状況だ。都道府県別にみると、沖縄(1・80)が最も高く、鹿児島(1・65)、宮崎(1・64)と続いた。最も低いのは東京(1・08)で、宮城(1・15)、北海道(1・20)の順。西高東低の傾向となった。

死亡数は戦後最多の143万9809人。新型コロナウイルス感染症による死亡数は1万6756人だった。人口10万人あたりの死亡率を都道府県別にみると、最も高いのは大阪府の31・1。兵庫県の26・8、沖縄県の26・0と続いた。感染拡大した都市部で死亡率が高くなった。

出生数から死亡率を引き算した「自然増減数」はマイナス62万8205人で過去最大の減少となった。鳥取県の人口(約54万人)を上回る規模の人口減が今後も続く見通しだ。婚姻数は2年連続の減少で戦後最少の50万1116組だった。厚労省はコロナ禍の影響も婚姻数や出生数を押し下げたとみている。

(久永隆一)